

中央アナトリアにおける銅石器時代解明に向けて —キュルテペ遺跡北トレンチ、西トレンチ発掘調査(2020年)—

紺谷 亮一 ノートルダム清心女子大学文学部教授

山口 雄治 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助教

フィクリ・クラックオウル アンカラ大学言語・歴史・地理学部教授

Investigation towards the Understanding of the Chalcolithic Period in Central Anatolia: Excavations at the Northern and Western Trench, Kültepe, Turkey (2020)

KONTANI, Ryoichi Professor, Faculty of Literature, Notre Dame Seishin University

YAMAGUCHI, Yuji Assistant professor, Archaeological Research Center, Okayama University

KULAKOĞLU, Fikri Professor, Faculty of Languages, History and Geology, Ankara University

紺
谷
亮
一
ほ
か

1. はじめに

2015年からキュルテペ遺跡北辺に設定した北トレンチ(図1)では、調査区北東部を更に4分割して調査している。それらを暫定的に西から東に向けて1区～4区とした(紺谷ほか2020)。北トレンチは最深部で地表下約6mまで達しているが、地下水が湧き出てきて、これ以上深く掘削することが困難になってきたこともあり、これに加えて2020年は新たに遺跡西側に西トレンチ(約15m×15m)を設定した(図1)。この場所は、中期青銅器時代以降の堆積層が大きく削平を受けており、前期青銅器時代と考えられる遺構・遺物が分布していたため発掘調査を行った。調査期間は2020年8月3日から8月31日までである。

2. 北トレンチの調査①：

VI層の大型ピットを確認

ここは発掘区で最も東に位置し、一昨年から未発掘の状態である。表層には部分的に焼土が見られ、一昨年の段階で確認された大型ピットの一部で、全体では径2.5mを超える。遺物の出土はほとんどなかった。またこの大型のピット1(焼土を多量に含む)に別のピット2(黒色土中に灰が混じる)が切られていることも判明した。ピット1覆土からは頸部に赤色彩文を持つ壺片が出土した(図2)。これは、ロクロ製で北シリアの前期青銅器後半に位置付けられ、キュルテペではオズギュッチによって指標資料とされている。また、この土器片周辺からは、インターミディエット土器片

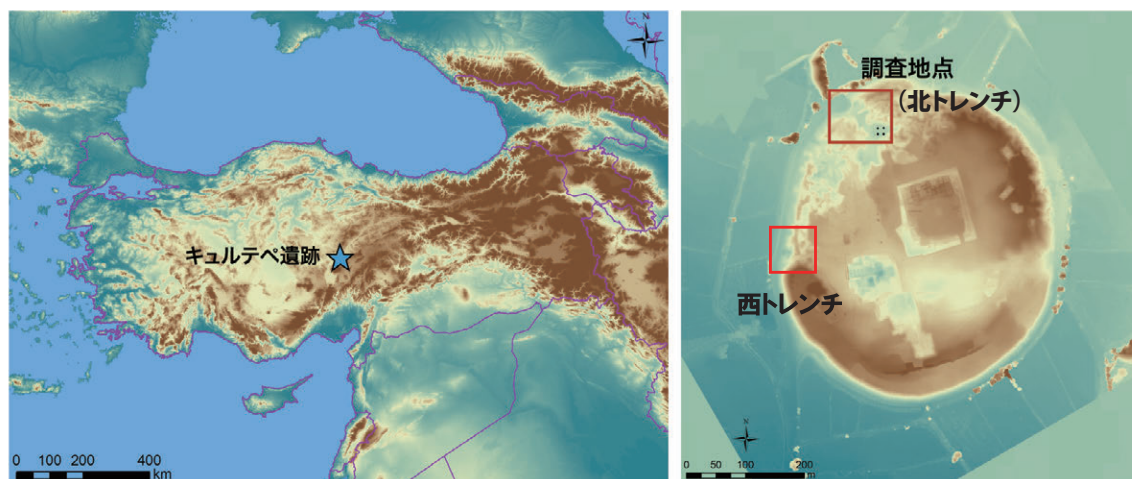


図1 キュルテペ遺跡の位置と遺跡地形測量図・調査地点(左は SRTM3 データを使用して作成、右の地形測量図は早川祐氏作成)

も出土している。これらは、今後キュルテペ編年を考える上で重要な情報となるであろう。

3. 北トレンチ4区の調査②： X層の建物構造を確認

昨年までに、X層の石列が南北・東西方向で検出された。いずれの壁体も大型の礫によって構築され、粘土張りがなされている。今回の発掘では、石列どうしの関係が明らかになった(図3)。石列どうしの結節

点を精査したところ、東西石列が南北石列を切っている事が明らかになった。つまり、南北石列の方が時代的に古く、昨年度出土した赤黒土器はこの石列に伴うと考えられる。ただし、どちらの石列も粘土張りであり、さらに掘り込み技法で作られていることから、時期差は僅かなものであろう。

出土資料からみても、X層は後期銅石器時代と前期青銅器時代の過渡期にあたる可能性がある。今後は、他発掘区で完全に銅石器時代と呼べる文化層を確認したい。



図2 赤色彩文をもつ壺形土器



図3 X層石列



図4 西トレンチ全景(東から撮影、手前がテペ)

4. 西トレンチの調査①：前期青銅器時代の周壁？及び大型建築址を確認

今年度から設定したこのトレンチは過去の村人らによる盗掘や土取りによって大きく削平されていた。ここに15×15 mの発掘区を設定し、さらにその中を5×5 mのグリッド(東西南北)で計6つに区画した。発掘前の地表面には灰及び焼土が確認できた。

西トレンチでは、少なくとも2つの建築層が存在する。第1建築層に属する建築址では、幅160 cmの壁を確認した(図4)。北側は切断された形になっているが、周壁もしくは城壁の一部の可能性がある。また、これに伴う敷石遺構も見られる。北側セクションには幅2 mを超える壁が見えており、方向性としては、この壁と繋がるものと考えられる。ただし、キュルテペの規模からして従来の城壁はさらに大きかった可能性もあり、今回発掘された構造物を確実に城壁と認定するには、発掘区の拡張等、今後の精査が必要である。なお、本調査区ではダルボアズ土器(コンヤ・メタリックウエア)が出土しており、これに伴う炭化物を年代測定した結果、2475~2340 cal BC(±2σ)の値を得た。

第2建築層では、大型建築址が検出された。プランから少なくとも3つの部屋が確認されている(図4)。また、これに伴う敷石遺構も存在する。前述した周壁下では厚さ約5 cmの灰層を確認した。大型建築址は、この灰層下にあり、建築層を分ける際の鍵となりうる。灰層内の炭化物を年代測定した結果、2572~2513 cal BC(±2σ)の値を得た。

5. 西トレンチの調査②：溝状遺構を確認

本調査区西側をさらに掘り下げると南北方向に伸びる溝状遺構が確認された(図5)。溝状遺構は部分的に



図5 溝状遺構

発掘した段階ではあるが、深さ約2 m以上、幅は5 m以上になる可能性がある。断面でも明らかなように、複数の堆積層が確認されており、かなりの期間、継続して使用されたと考えられる。当遺構の機能については今のところ不明であるが、南北方向に伸びていることから、環濠のようにテペを囲んでいた可能性もある。また、断面には茶褐色の水性堆積層が見られることから、一定期間、溝に水が溜まっていたと考えられる。防御システムもしくは、運河のような性格であったのか、今後の調査が待たれる。時期は、精査が必要ではあるが、第2建築層と同時期もしくはそれよりも古い可能性がある。

6. キュルテペにおける銅石器時代の文化層の行方

西トレンチにおける発掘により、テペ全体にかなりの密度で、前期青銅器時代の文化層が存在する可能性が高くなってきた。残された課題は、確実な銅石器時代の文化層をとらえることである。来年度は、テペ中央部のワルシャマ宮殿下を深掘りする予定である。

また、2020年11月21日には日本西アジア考古学会第25回大会で特別セッション：「中央アナトリアの都市化—メガシティ、キュルテペの成立の背景をさぐる—」で現段階での発掘最新成果をある程度明らかにすることができたと考えている(紺谷2020)。セッションに参加された方々、有意義な質問をされた方々のご期待に沿えるよう、より一層、調査に専念していきたい。

なお、今年度の調査はJSPS科研費JP20K01097(代表：紺谷亮一)、2020年度三菱財団人文科学研究助成(代表：紺谷亮一)、高梨学術奨励基金(代表：山口雄治)を中心とする研究費によって実施した。

参考文献

- ・ Kulakoğlu, F., Kontani, R., Uesugi, A., Yamaguchi, Y., Shimogama, K., Semmoto, M. 2020. Preliminary Report of Excavations in the northern sector of Kültepe 2015-2017. Subartu 45: 9-88. Brepols Publishers.
- ・ 紺谷亮一 2020「趣旨説明：アナトリアにおけるメガ・シティの起源」『日本西アジア考古学会第25回大会要旨集』9-10頁 日本西アジア考古学会(http://jswaa.org/wp/wp-content/uploads/2020/10/25thJSWAA_abstracts.pdf)
- ・ 紺谷亮一・山口雄治・下釜和也・フィクリ・クラックオウル 2020「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて—キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査2019年—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』49-51頁 日本西アジア考古学会